

アル＝キンディーのアリストテレス 哲学に対する態度について

——初期アリストテレスの思想研究のために——

赤井清晃

Kiyoaki AKAI

はじめに

初期アリストテレスの失われた諸著作を再構成する試みにおいては、ギリシア語、ラテン語による後代の著作家の証言が主な依り所となることは言うまでもない。けれども、ギリシア語、ラテン語による資料以外に、9世紀の「アラブの哲学者」アル＝キンディーの証言があり、ロスの『アリストテレスの断片集』(W.D.Ross, *Aristotelis Fragmenta Selecta*, 1955)においても、『エウデモス(或いは、魂について)』に関して、アル＝キンディーの証言が2カ所¹⁾採用されていることは周知の通りである。

アル＝キンディーの証言を利用することには、ギリシア語、ラテン語による資料には見い出されないアリストテレスへの言及を初期アリストテレスの諸著作再構成に利用できるという利点があると同時に、アル＝キンディーの証言をどこまで文字通りに受け取ってよいのかという、資料的価値に関する問題がある。

この問題に関して、初期アリストテレスの研究に携わる者は、現存するギリシア語、ラテン語による資料には見い出されないが、アル＝キンディーの証言に

1) 『エウデモス』 fr.11(Ross)のcod.Taimuriyye Falsafa 55. と cod.Aya Sofia 4832, fol.34.

は言及されている事柄に関して、西欧には伝わらなかった原テキスト（ギリシア語）が存在し、それを翻訳を介してであれ、何らかの形でアル＝キンディーが利用し得たと判断する²か、それとも、アリストテレスに限らず、ギリシア哲学がイスラームの世界に伝えられる過程で、アル＝キンディー自身が翻訳者らによって、誤ってアリストテレスに帰せられた³か、あるいは故意に付け加えられたと判断するかのいずれかを迫られる。前者の道を探るならば、テキスト伝承の経緯を文献学的に跡づけなければならないが、これは物理的に不可能なことが多い。後者の道を探る場合も、判断を下す前に、アリストテレス以外の典拠がないか否かをできる限り調査しなければならない。しかし、いずれの場合も、テキストに対するアル＝キンディー自身の態度がどのようなものであるかを前提として研究を進めなければならないことは言うまでもない。

上述の問題を踏まえて、本稿は、最初に、主にアル＝キンディーの『第一哲学（形而上学論攷）』に基づいて、「真理」に対する彼の態度を中心に、アリストテレスを含めたギリシア哲学に対するアル＝キンディーの姿勢をできる限り明らかにし、その後で、アリストテレスの初期著作『エウデモス』と『プロトレプティコス』に関するアル＝キンディーの証言について若干のコメントを加える。

2) Fahkry (文献[7]), p.58 n.によれば、初期アリストテレスの著作に関するアラブ語文献の研究は、K.Merkle(1921), R.Walzer(1934)以来続けられて現在に到っている。しかし、私見によれば、初期アリストテレスの断片資料として、アラビア語文献を採用することに最も熱心だったのはWalzerで、そのWalzer亡き後、この方面での積極的な研究成果は未だ出ていないと思われる。本稿では、取り上げることができなかったが、『哲学について』に関して、R.Walzer, "Aristotle *De Philosophia* Fr.24 in the Arabic Tradition"(Düring & Owen (eds.), *Aristotle and Platon in the Mid-Fourth Century*, Göteborg, 1961.), p.105-112. を参照。

3) イスラーム哲学史上、よく知られた例としては、アル＝キンディーの名を冠して、ラテン訳された『知性論(De intellectu)』とともに知られている「知性」の4区分法がある。今は、この区分の内容に立ち入らないが、アル＝キンディー自身は、この4区分はアリストテレスによるものと考えている。しかし、現存のアリストテレスの著作には、直接的にこのような主張の典拠となる箇所はなく、アフロディシアスのアレクサンドロスによる『デ・アニマ』註解や、新プラトン派の説に新ピュタゴラス派の四分法が加わったものが基になっていると考えられている。井筒(文献[9]), 231-232ページ参照。

1 アル＝キンディーの「真理」に対する態度

アル＝キンディーは、アッバース朝のカリフ、アル＝ムアタシムに献じた『第一哲学（形而上学論攷）』の序文で次のように述べている。

「我々は真理の価値を認めることをきらってはならないし、いかなる源から由来する真理であろうとも、獲得すべきである。たとえ、その真理が我々とは異なる遠く離れた民族、国民に由来するものであっても。というのも、真理を追及する者にとっては、真理そのものよりも価値のあるものはないからである。また、いかなる者も真理を通じて評判を落としたり、真理によって過小評価されたりすることはないからである。却って、真理はすべての者を高めるのである。」⁴⁾

ここから知られるアル＝キンディーの真理探究の姿勢は、彼自身が敬虔なムスリムであったことと、当時一般的であったxenophobiaを考慮に入れると、革新的なものであった⁵⁾。

アル＝キンディーにとっては、信仰（宗教）と知性の問題、言い換えれば、予言者の啓示と哲学的な探究とは、最終的には一致すべきものでありながら、哲学的な探究は予言者の啓示には劣るものと自覚されていた⁶⁾。けれども、哲学的探究は決して価値のないものであるどころか、信仰と並行して人が努力すべき道であった。というのも、イスラームの信者だけが真理を知っているのではなくて、昔の人（ギリシア人）であれ、遠く離れた民族が発見した真理であ

4) Al-Kindi (文献[1]), p.81. この『第一哲学（或いは形而上学論攷）』には、英語訳（*On First Philosophy*, translated by Alfred L. Ivry, New York, 1974）が存在するが、残念ながら、筆者は見えていない。ただし、この箇所に限っては、S.H.ナスル（黒田、柏木訳）（文献[10]）4 ページに、R.Walzerの英語訳に基づいた邦訳が引用されている。

5) Fahkry (文献[8]), p.5.

6) 井筒(文献[9]), 233-234ページ。

れ、何時、どこでも妥当する普遍性をもっているからである。アル＝キンディーは、アリストテレスの『形而上学』*α* 巻、993b11以下をパラフレーズして次のように言っているが、その中で、「或る一定の真理を我々に授けてくれた父祖たち」と言われている者は、自国だけでなく、異国の「父祖たち」も念頭におかれている。

「我々は、或る一定の真理を我々に授けてくれた父祖たちに感謝するべきである。彼らがその存在の原因であり、我々が真理に達する原因であるかぎりにおいて。」⁷⁾

実際、「ファルサファ（哲学）」はギリシア人のもたらしたものであるが、アル＝キンディーは、その「哲学」を定義して、「人間の能力の限界内において可能であるかぎり事物を真にそのあるがままに認識すること」⁸⁾としている。このような哲学的探究の精神がギリシア人のテキスト⁹⁾に向けられると、次のような手続きをとることになる。

「まず古人（ギリシャの哲学者達）がある主題について言ったことがあれば、それを詳細に調査する。次に彼らが十分に確立できなかった不完全な箇所について思いをひそめ、それらの欠陥を埋めて行く。そしてそれにあたっては、必ず我々の言語（アラビア語）に固有の思惟形態に順応しつつ、かつ我々が現に生きている今のこの時代の習慣に従い、しかも自分の能力の限りを尽くすこと」¹⁰⁾

7) Al-Kindi (文献[1]), p.80.

8) Baffioni (文献[2]), p.128. および、井筒(文献[9]), 233-234ページ。

9) もちろん、アル＝キンディーが直接接したのは、アラビア語に翻訳されたものである。Peters (文献[11]), p.121.

10) 井筒(文献[9]), 234ページに引用された、筆者は未見のAbu Ridah(ed.), *Rasa'il al Kindi al-Falsafiyah*, Cairo, 1950, 1953.に基づく井筒氏の翻訳。

この手続きにおいては、詳細な調査の後の、「古人が十分に確立できなかった不完全な箇所について思いをひそめ、それらの欠陥を埋めて行く」という点と、「そしてそれにあたっては、必ず我々の言語（アラビア語）に固有の思惟形態に順応しつつ」という点で、原テキストにはないものを新たに付け加えるというテキスト改竄の誹りを免れない。従って、アル＝キンディーの証言は、アリストテレス個人の名を明示している場合を除いて、アリストテレスに関する証言としては、そのまま信用することはできない、と考える必要がある。これは最低限の基準であり、当然と言えば、当然のことであるが、この基準に従ってもなお、アリストテレス以外の語句が混入している可能性があると言わなければならない。

2 『エウデモス』について

『エウデモス』に関するアル＝キンディーの証言として採用されているものは、すでに言及した2カ所(fr.11, Ross)¹¹⁾である。これらの箇所では、書名としての『エウデモス』には言及がないけれども、アリストテレスの名が明示されていることが、この証言を採用する理由になっていると思われる¹²⁾。

2カ所の内、一方(cod. Taimuriyye Falsafa 55)の特異な点は、魂が身体から離れたときに、ある種の幻想を見ることが述べられているのだが、その幻想の内容は、魂、形相、天使たちという驚くべき天上の世界の光景であるとされていることである。これに対して、プロクロス¹³⁾の証言は、それが『ポリテイア註釈』であることからして、「かの地(ἐκεῖ)」と「ここ(ἐν ταῦθα)」と言われるものが、それぞれ、エルのミュートスに見られる「地下」のイメージと地上の現世であると言えるだろう。とすれば、肉体から離れ魂は、アル＝キンディーの証言で

11) 註1) 参照。なお、この2つの写本を直接見ることはできなかったもので、本稿の論述は、Ross(文献[13]), p.23の英訳に依っている。

12) Berti(文献[3]), p.434-435はこの証言を重視している。Décarie(文献[4]), p.38参照。

13) fr.5 (Ross).

は、天上の光景を、プロクロスでは、地下の幻を見るということになる¹⁴⁾。しかし、このように、幻の内容についての差異があろうと、なかろうと、ミュートス的な表現にどれだけの重要性をもたせるかは問題として残ると言わなければならない。

3 『プロトレプティコス』について

次に、『プロトレプティコス』に関するアル＝キンディーの言及としては、Walzer(1934)によって採用された次の箇所があるだけである(Walzer, fr.51R)。

「哲学の敵対者の発言からでさえ、哲学的な知識は獲得される必要がある。その理由は次の通りである。彼らは、哲学的な知の獲得が必要であると言っているか、それが必要でないと言っているかのいずれかでなければならないが、もし、必要であると言っているのであれば、その場合は、その知識を探究することが人々に義務として課せられる。他方、もし、彼らが哲学的な知の獲得が必要でないと言っているのであれば、その場合は、彼らは、何故必要でないのかの理由を与え、その証拠を提示しなければならない。ところで、理由や証拠を与えるということは、実在する事物についての知識を部分的に所有することである。従って、哲学的知識を探究することが、彼らの発言によって、避け難く必要なこととなり、その探究に執着することが、彼らに課せられるのである。」¹⁵⁾

この箇所は、明らかに、哲学することを勧めるための議論として、「人は哲学するべきか、哲学するべきでないかいずれかである。哲学するべきであれば、当然、哲学するべきであるし、哲学するべきでないならば、何故、哲学するべ

14)Lloyd (文献[10]), p.30が指摘するように、エルのミュートスに加えて、『パイドロス』のミュートスのような、魂が真実在を見るという、輝かしい天上のイメージから、発想を得ている可能性がある。

15)Al-Kindi (文献[1]), p.82.

きでないかを哲学（考察）するべきである。従って、いずれの場合も、哲学するべきである」という、オリュンピオドロス、エリアス、ダヴィド、クレメンスら¹⁶⁾に共通の論法を含んでいる。特に、オリュンピオドロス、エリアス、ダヴィドの3人は、アリストテレスの名と『プロトレプティコス』（あるいは、明らかにそれとわかる表現）とともに、この論法を紹介しているので、かなり有力な典拠として採用できるものである。アル＝キンディーの言及も、直接の典拠が何であるかを特定することは難しいが、上述のギリシア語の著作かそれに基づいた著作の翻訳に依っていると考えられる。

このアル＝キンディーによる、おそらくは、アラビア語によって書かれた最初の「哲学の勧め」¹⁷⁾は、証言の採用には禁欲的なDüring(1961)によって言及もされずに無視されているのをはじめとして、この証言を採用しない研究者がほとんどである¹⁸⁾。この箇所を採用しない理由については、かれら研究者は沈黙して語らないので、推測するしかないが、おそらく、この箇所では、『エウデモス』に関する証言とは違って、アリストテレスの名が明示されていない、ということがその理由であろうと思われる。また、この点が、オリュンピオドロス、エリアス、ダヴィドの3人の証言との相違点でもある。

おわりに

アリストテレス研究者としては、アル＝キンディーの証言に拘泥することは労多くして益少なし、の観がある。本稿は、イスラーム哲学史家のアル＝キンディー研究の成果を俟つか、みずからアル＝キンディーのテキストに取り組むか、の選択に後者を選んで始めた研究の途中経過報告である。残された当面の課題としては、今回果たせなかった『エウデモス』に関する証言の原典に即し

16) Ross (文献[12]), fr.2, Düring (文献[6]), A4, A5, A6.

17) Fahkry (文献[7]), p.59.の表現。

18) Berti (文献[3]), Dumoulin (文献[5]), Ross (文献[12]) など。

た調査と『哲学について』に関する証言の調査である。これは他日に期したい。

付記：小論は平成7年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(京都大学医療技術短期大学部・非常勤講師・哲学)

文献

- [1] Al-Kindi, *Fi al-Falsafa al-ula*, Cairo, 1948.
- [2] Baffioni, C., *Storia della filosofia islamica*, Milano, 1991.
- [3] Berti, E., *La filosofia del primo Aristotele*, Padova, 1962.
- [4] Décarie, V., *L'objet de la Métaphysique selon Aristote*, 2ed., Paris, 1972.
- [5] Dumoulin, B., *Recherche sur le premier Aristote*, Paris, 1981.
- [6] Düring, I., *Aristotle's Protrepticus, An Attempt at Reconstruction*, Göteborg, 1961.
- [7] Fakhry, Majid, "Some apophthegms of Aristotle in classical Arabic sources and their relation to the Protrepticus", *Philosophical Inquiry* 1, Athens, 1978, pp.58-64.
- [8] Fakhry, Majid, "The Arabs and the Encounter with Philosophy", in Therese-Anne Druart (ed.), *Arabic Philosophy and the West*, Washington DC, 1988, pp.1-17.
- [9] 井筒俊彦, 『イスラーム思想史』, 中公文庫, 1991年。
- [10] Lloyd, G.E.R., *Aristotle: The Growth & Structure of his Thoughts*, Cambridge, 1968.
- [11] S.H.ナスル (黒田壽郎, 柏木英彦訳), 『イスラームの哲学者たち』, 岩波書店, 昭和50年。
- [12] Peters, F.E., *Aristotle and the Arabs*, New York, 1968.
- [13] Ross, W.D., *Aristotelis Fragmenta Selecta*, Oxford, 1955.
- [14] Ross, W.D., *The works of Aristotle, Vol.XII, Select Fragments*, Oxford, 1952.
- [15] Walzer, R., *Aristotelis Dialogorum Fragmenta Selecta*, Firenze, 1934.